

発表例Ⅰ

「小説文体の変遷」にある作品で、言葉の抵抗なく読めるのは、夏目漱石の『坊っちゃん』と田山花袋の『蒲団』くらいである。両方とも今からほぼ20年も前の小説だが、文体的には現代の小説とまったく同じであると言ってよいのではないだろうか。

尾崎紅葉の『金色夜叉』以前の作品はまさに古文であり、すんなりと読むことはできない。坪内逍遙の『当世書生氣質』や二葉亭四迷の『浮雲』は、正確に言えば、古文というよりは現在の小説の文章に近いのだが、句読法やカギ括弧の使用などが今日とは異なり、古めかしくて読みづらく感じる。

「小説文体の変遷」全体を通じて、「文体の持つ力」の筆者が述べているように、江戸後期から明治時代までの三十余年間は小説の文体が劇的に変化していく過渡期であるが、それと日本が近代国家に向けて大きく舵を切っていく時期とが重なっていて興味深い。近代国家の成立と近代小説の成立はどこかでつながっているのかもしれない。「文体の持つ力」とは、登場人物の内面が描かれるようになったとかという表現上のレベルではなく、政治とか社会とかを動かすような力のことかも知れない。

発表例2

小説文体の種類を調べる過程で、日本語の文章、書き言葉の形式に、和文・漢文（日記の文体）・漢文訓読体・擬古文・雅俗折衷体・和漢混淆文・言文一致体というように、様々な種類があることが分かった。また、古文として括られる和文から和漢混淆文までの文章体が言文一致という改革運動によって一挙に淘汰され、明治期が書き言葉の歴史の中で一大過渡期であったことも理解できた。

こうした文体の変化を「小説文体の変遷」の個々の作品で確認してみると、文体の変化を促す要因が作品の背後に表現者の意図として存在することがおぼろげながら見えてくる。例えば、『佳人之奇遇』では、東海散士がエキゾチックな雰囲気を読者に伝えるために漢文訓読体をベースにした和漢混淆文を選択したり、『金色夜叉』では尾崎紅葉が貫一を待つお宮の妖艶な外貌と孤独な内面を陰翳深く描くためにあえて古めかしい江戸期的な雅俗折衷体を採用したりしたように、それぞれの小説の作者が描きたいものを描くために既成の文体の限界を突破しようとして文体が選り採られたのではないだろうか。逆に言えば、明治期はこれまでにない新たな描きたいものが発見された時期でもあったということもできるだろう。しかし、読者の立場に立って考えてみると、江戸から明治にかけて生きてきた人々はこうした変化にずいぶんとまどったのではないか。これまで読んできた文章がいつの間にか変化し、それに慣れるまでに時間もかかったのではないかとも思った。

小説の文体の変遷はある程度理解できたのだが、例えば、新聞の文体とか手紙文の文体とか、あるいは教科書はどうだったのかを調べてみたくなった。また、現代の小説の文体は将来変わっていくのか、話し言葉は変化しなかったのか、さまざまな疑問がわいてきた授業であった。